

それが一刻も早く当たり前のように広まって、失業することが僕の夢なんです。そのために僕はこれを立ち上げてやることにしたんだ”って言つてたので。もしくは自己顕示欲を満たすためか、生活の糧にするものだと。その会話の中ずっとCTIジャパンのPRもしなければ他のコーチング団体の批評や批判もしないし、奢りなんかどこにもなくて。“なんじやこりや……”つて、ものすごい衝撃を受けましたよ。少なくとも、僕のそれまでの人生の中で全く出会つたことのない、初めてのタイプの方でしたね。」

りょうさんはかつてないほどの衝撃を受け、放心状態のまま約束の一時間が過ぎた。最後にCTIジャパンが提供するコーチングプログラームの案内をメールしてもらうことだけお願いしました。そして、それまでセミナー勉強会では一度も大枚をはいたことがなかつたが、「最悪、もしこれがダメでも、榎本英剛という人とより深く知り合えればそれでいい!」といふ強い想いに突き動かされて、コーチングプログラムの受講を決心した。

***自分の可能性を信じてくれた人**

は当時、2期生として、自分も学びて、米国CTIのシニアリーダー、フィル・サンダーラーさんの通訳をしていた。「彼女は少し自信がなさそうに見えるけれど、すぐ、スペースを持つて、どんな自分も受け止めてくれそうな心の広さを感じる人でした。僕は臆病だったから、その雰囲気に惹かれて、コーチをお願いしたんです。」

チングの中で彼女の許しのスペースに解きほぐされ、物事を頭で考えがちだったところから徐々に変わつていった。そして応用コースの最終回、イン・ザ・ボーンズを迎える。

らへつて流れてたんです。一人か二人がぼろぼろつて泣くくらいで。なんかちよつと冷えてる

ムの案内をメールしてもらうことだけお願ひした。そして、それまでセミナーや勉強会では一度も大枚をはたいことがなかつたが、「最もしこれがだめでも、榎本英剛という人とより深く知り合えればそれでいい!」という強い想いに突き動かされて、コーチングプログラムの受講を決心した。

最後の一言を言うところまできてしまった。僕は最後から2番目でみんなの様子を見て何を言うか決めようと思つていたので、さらさら流れてるし、ちょっと冗談でも言つて場を和まそうと、言う冗談まで決めてたんです。それに僕の番になつたとき、なんとかわからな

いけど、『ほんとに僕の人生は、グレムリン（自分の中にある自己制約的な声）に支配された人生だった』ってボロつて出たんです。その瞬間にぶわーって涙が出始めて。“社会人になつて、何枚もの名刺を交わしてきたけど、その人とほんとに心が触れるつていう感覚が全然なくて、もう、人生はこんなもんだって諦めきつてた。こんな風に人に触れられる人生が戻つてくれ

*自分の可能性を信じてくれた人

「あ、アーファメーションの勉強会でしかりようさんと接したことのなかつた私は、この話を聞いて、りょうさんも私と同じ一人の人間なんだ」と今さら実感した。それは、幼い頃に親や先生が無条件に“すごい人”に見えていたところから、ある日急に、自分と同じ一人の生身の人間なんだつたら、イン・ザ・ボーンズでの出来事は涙を流して語ってくれた。りょうさんはとても興奮していて、「！」だけでは到底表せないほどだつたし、イン・ザ・ボーンズでくらめた、人間味溢れる彼自身を惜しみなく見させてくれた。

間に、本当に自分の何かが空いたっていう感じがしました。そしたら京子さんがフィルさんの隣で、もうぼろ泣きして、通訳ができなくなつていて。そのときには“本当にこの人は、僕の可能性を本当に見ててくれたんだ”って思いました。会場もすごいボロ泣き状態で、まさか自分がそんなこと起こすと思いませんでした。あれは本当に不思議だった。なんであのときあの言葉が出了のか、今でもわからんないです。でも何よりも、そのときの京子さんの姿にものすごく打たましたね。僕のちょうど真向かいで、京子さんが嗚咽して泣いていた、未だにそのシーンは覚えています。」

「臆病で虚勢を張り、ロジックで自分を誤魔化して今まで生きてきた」りょうさんだったが、二人との出逢い、コーチングとの出逢いを機に、全く新しい人生のスタートを切つた。

*りょわんと、りょわんのお父さん

「僕は父親との関係を一步引いて作っているのは知っていたけど、それを父親と本当に愛情を分かち合う関係にずっとできていなかったという感覚がありました。」

りょうさんの父親は貿易船のコックだった。廣島の田舎町の中で、海外に出て世界を知つてから父親は一目置かれて子王どころ、りょう

いる。父親は「自置かれた存在であり、やがては」と、
さんととても憧れの存在だった。しかしその
反面、「こうあるべき」という父親の強い持

論を押し付けられ、怒られることが少なくなるからだ。それよりもうさんは恐ろしかったし、

つたみたいで、これやつちやだめ、あれやつち

やだめと言われることが多かつたんです。だから自分が自分らしくいられない、わかつてもらえない感覺がずっとありましたね。」

二年前に参加したセミナーをきつかけに、りょうさんは父親との関係をクリアにしようと、何度もチャレンジしては失敗してきた。そしてやつと、つい一週間前に、本当に自分が言いたかったことを父親に伝えられた。

「本当に父親が誇りだつた反面、自分が大

人になつていくにつれて、わかりきつてることをとうとうと論されたり、私の觀點から見てみれば的を外していると思えるようなことを“これが正しい”と言われるのが嫌だつたんです。

そんな不器用な父親がまた不憫にも思えてしまつて。そのことをすつと言いたかつたんだけど、それを言うと父親を壊してしまふんじやないかっていう思いが言わせなかつた。でも、本当に言いたかったことを伝えて、その想いを自分で身も味わえて父親に受け取つてもらった時、自分の中にすごいスペースが空いたかんじがしました。」

に手放せた。

この話を聞いて私は、やっぱりそこに戻るのか、と思った。今の自分を見つめたとき、

両親や家族との関係が大きく影響していることを知つてはいた。でもそれがわかつていいながら、家族と、両親と真正面から向き合うことを今までなおざりにしてきた。見て見ぬふりをしていた。けれども、両親は自分が生まれて最初の出逢いであり、すべての始まりの、大きな大きなかつたことだ。

「親子関係は大きいです、とても。ベースだけが正しい」と言われるのが嫌だつたんです。出会う人すべてに対し、父親系か母親系か、どちらかに区別して人は接してゐるなつて。ざつくり言つて。僕の今までの人間関係も見てみたら、簡単に分類されていたんですよ。」

未来のビジョンが見え、一番の元になつていった父親との関係もクリアになつたりようさんには、私の想像の範疇を遥かに超える出来事が起きはじめていた。平たく言つてしまえば、りょうさんがMLで宣言したことの共鳴＝奇跡的なことがそこかしこで起ると同時に、

りょうさんの持つメンタルモデルが今まで以上に敏感になり、刺激されたときの反応がその場で身体に影響が出るほど、顕著に現れるようになつた。

「そのりょうさんの体験談から話は膨らみ、

私の收拾のつかない方向へとどんどん展開していく…。(以下インタビュー形式)

「今」 りょうさんが伝えたいこと

いた。僕の尊敬している師匠の方たちが、自分

をクリアにすることをすごく大事にされているんです。それが彼等が果たそらとしている責任の一環だというのは、僕も知つてはいました。

自分が幸せになりたいからやつてはいるのではなく、自分がクリアでいることが、どれだけ世界にとって大切なことがわかつて実践しているのが見てとれた。でも、それが一体何を意味するのかはわかりませんでした。(最近になって)こういうことかー…えらいところに踏み込んだな、と思つています(笑)。

おきょう　さつそくついていけません(笑)。直接見えないところでもつながつてはいるつていふことでしようか。そう言えば、最近ほんの少し芽生えた感覚があるんですが、「自分は“佐野恭子”という個性ある独立した存在であるとともに、何か大きなものの一部なんじやないか」と思うことがあつて…。

*人間の認識の限界

りょう　一言で言うと、“なんじやこりやーーー”

という状態。僕は、クリアになつたら奇跡的なことが起ることを知つてはいました。だから早くクリアにすることは大事だなつて思つてた

に、実はそこには人間の認識の限界みたいなところがあつて。もともと宇宙はエネルギー一体だから、本当は一つのはずなんです。一見、物理的に離れてはいるように見えるけれど、実は高分子、分子、原子っていうふうに物質を分解していくと素粒子の世界になると、全部が粒であり波であると言われています。だから、僕とおきょうちゃんも、一見分かれているように見えますけど、素粒子の世界では一体化してゐるんです。

MLで僕が紹介した『シンクロニシティ』出てくる表現の一つに、「内蔵秩序」というものがあるんですが、それは、全体は全体として

身も味わえて父親に受け取つてもらった時、自分の中にすごいスペースが空いたかんじがしました。」

そこでりょうさんは気付いた。今まで他人を分かつてているか、分かつてないかで区別していたこと、分かつてない人を分からせようとして、ダメだつたら逃げるか叩きのめすというパターンをずっと繰り返してきたこと。頭ではわかっていたけれど、改めて腑に落ちたかんじがした。分かつてない自分は、誰かに支配されるんじやないかという恐れがあつた。それを補うためにとことん学んだ。いつの間にか、父親との接し方を全ての人に対してしてはいた。それがあるんだと本当に受け入れた時、同時

部分を持っていると同時に、部分は部分で全体を包含していることを言っているんで
すよ。自分自身が宇宙の中にいて、かつ自分の
中に宇宙がある。しかもそれらはつながってい
る。……もう人間の認識を超えてるんです。

おきよう わかるようでわからないような心地の悪さが…。こういう話は何度してもすつきりしないんですよね。

りょう 本当に人間の認識の限界を超えているからね。僕は今いちばん、“人間が言語の動物である以上、因果関係でしかわかりようがない”というのを伝えたないとすぐて思つていて。さつきの素粒子の話に戻ると、『シンクロニティ』の中で、ある粒子が回転すると、まったく別のところにある粒子もそれと同時に回転するという話が紹介されているんです。例えば、ニューヨークの粒子が回転すると同時にロンドンにある粒子も回転する。これを言葉で理解しようとすると、“粒子Aが回転する”と粒子Bが回転する”っていうふうに因果関係に捉えがちですが、実を言うとどちらが先に回転してるのはわからないんです。同時に回転し

“ 大いなるものがいて私がいる”とか、“私が××だから○○が起つた”とか。
さつき、僕がクリアになつたから、奇跡的なことが起つたって因果関係で表現しましたが、それも実は周りがクリアだから僕がクリアになつたかもしれないんです。ただ、“私”つて

いうのは自分の言動しか扱えないように見えるから、自分が変わるしかない。自分が原因、源泉という立場で物事に関わるという表現がよくリーダーシップの文脈で使われるんですが、それは自分の「せい」だと思いなさいとか、自己責任だと思いなさいという意味ではないと僕は思っていて。どちらが原因でどちらが結果のなのかも実は全然わからないけれど、少なくとも人間は自分の言動しか扱えない。だから、真実かどうかは別として、自分が変わるしかないんです。仮に100%相手が悪いと見えていても、相手に「あんたが変わってくれないから」となんて言つたところで始まらないことの方が多いですね。「他人と過去は変えられない」とよく言われますから。また、自分の言動を変えることで結果が変わったた 양に見えるんですが、それも本当のこと、自分の「おかげ」で変わったかどうかはわからないんですね。因果関係を幅広く捉えるようにできるようになると、妙な気負いもないし、責任という言葉が自分のせいだつていうふうに聽こえなくなります。究極的には何が原因かはわからないけど自分の言動しか扱えないから自分を扱おうという責任感覚になるんです。

それが本当に人が自由になり得る扉だと、僕は思っています。例えば、『シンクロニシティ』を表面だけで読めば読むほど、「何か決意しないと始まらないんじゃないか」とか、「大いなるものみたいなものがあつて、それに導かれるのがいいことだ」と思つてしまいがちです。クオントム・エンジでもそこがうまく伝えられないから誤解が生まれていると感じることがあるんですが、参加者がメンタルモデルを変えなきやいけないつて思つて、メンタルモデルを変えるのに躍起になつてゐるようと思えることがあります。でもそれは“変わつてない自分はダメだ”というメンタルモデルが影響しているだけなんですね。そうすると、やればやるほど自分が変わつてないことにショックを受けはじめてしまいます。

“究極、何が因果関係かわかんないから、まずはメンタルモデルを変えてみよう”つていうのと、“メンタルモデルが変わらないと自分が変わらない”“大いなるものとつながらない”って思つてゐると、大きな差があります。そこが、うまい伝えられていないなつて思つてします。平たく言うと、決めつけないつてことなんですね。“メンタルモデル変えるのがいいかも

りょう そうそう・その感覚が掴めると、人生を生きていく上で全ての選択は、コーヒーか紅茶かというのと一緒くらいいの選択になります。どうなんですか。どうでもいいよ、好きな方でいいよねって、自由な選択ができる。本当は紅茶も飲めるのに、「私はコーヒーを飲むないと不幸になるから紅茶は飲まないんです!!」って決め付けて生きていくのは窮屈な感じがしますよね。とはいっても、それが悪いわけではないんですけど。ただ、因果関係の枠でしか考えられないことに気がついていないと、どつちかを絶対視してしまうので、その結果、「○○ができるないから自分は不幸だ」「××をやつてないからあいはずだめだ」っていうふうに考えてしまう。本当はどうつちが原因でどうつちが結果かはわからない、そこを掴んだ上で限界を突破できると、ずいぶん自由になれると思っていいます。人を責める必要も自分を責める必要もないから。でもこれを言葉で理解してもらうのではなくて、感覚で掴んでもらおうっていうのはまだ見えません。それが出来たらクオントムチエンジの次のコンテンツが出来ると思っていいけれど、どう伝えていいかはまだわからないですね。

おきよひ せひ、お願ひします——そ(一)

りょう（笑）。必ず、喧嘩したり腹が立つたときつて、因果関係で物事を捉えているからだと思うんです。“あの人がああ言つたから私はこうだ”という捉え方に囚われている。この状態から抜け出すには、それをもう一人の自分が見つめるしかない。“やつぱり自分は因果

関係でしか理解できないんだな”、そして、究極的には何が原因なのかはわからないんだから、自分が原因ってした方が手っ取り早いよねっていうのがシンプルに見えるはずなんです。

おきょう なるほど……。“因果関係”といふことが見えない。それから一步出ちゃって、もともとそこに枠があるんだよっていうのを見ると、もっと外に広がつてるのがわかるんですね。

りょう そうそうそうそう。みんな、“因果関係でしかない”って思つてる。それが、人間が持つてる一つのメンタルモデルなんです。そして、何が原因で結果としてみているかはそれぞれ人によつて異なつていて。ただそれはあくまで一つの見方であつて、真実なんかわからんといつていうところに立つて見てみると、見えるものが違つてくる。それがわかつた上で因果関係を使うと、自由でいられます。落ち込んだりしないし、傲慢にならなくなる。勉強会の参加者がよく僕を謙虚だつて言つてくださらんですが、それはなぜかと言うと、僕はあの勉強会の場を自分で起つた、自分のおかげでこんな風になつたとは思つてないからだと思います。ほんとのところどうなかわらない。ただ、僕は自分しか扱えないの、自分を原因として自分が出来るこつをやつていて。そして、自分がやつたから勉強会で成果が生まれたという因果関係で結果を捉えると傲慢になつてしまつので、それを手放してただけなん

です。それに、どうやらそういうふうにやつてる方が、みんながハッピーに見えるし、すごく場が広がつていく感じがする。だから僕は謙虚でいようとしてるんじやなくて、結局、因果関係捉えた所で本当にそなのかはわからないので、そんなことで一喜一憂してもしやあないよねつて思つてるだけなんです。

おきょう *偶然に身を委ねながら、自分で舵をきる

りょう りょうさんの人生のテーマ「人々の純粋な想いと願いの目覚めとその実現を支援する」についていくつか質問なんですが、ま

ず、“純粋な”というイメージはどういうかんじなのでしょうか。

りょう 脳の話になるんですが、マククリーン原図によれば、脳の構造は原始爬虫類脳、大脳辺縁系、大脳皮質の三層で表されています。例えれば車を運転していて、突然右からバイクが飛び出してきた時、反射的にブレーキを踏む動作を原始爬虫類脳が司つていて、その後、“危なかつた”“恐ろしかった”とか“出でくんぬふさけんな！”という感情を司つていて、そのときが訪れる、近い感覚です。どうやるかって言われたら、“訪れるように自分をつかをする”というより、勝手に起きている、そのときが訪れる、近い感覚です。どうやるかって言われたら、“訪れるように自分をつかをする”というより、勝手に起きている、そのときが訪れる、近い感覚です。どうやるかって言われたら、“訪れるように自分をつかをする”かんじです。自分が負のメンタルモデルに支配される状態（脳の思考に支配される状態）だとそれが訪れないでの、訪れるようにクリアにしているとしか言いようがないですね。

おきょう 正確に表せる言葉はないけど、その中でも一番近いと言えば「目覚め」というかもしれません。そもそもりょうさんの“クリアになる”っていう感覚は、どういう感覚なんでしょうか。

りょう 自分が何かが起つる「場」であつたり「スペース」のようになつていて、自分が何かをするというより、勝手に起きている、そのときが訪れる、近い感覚です。どうやるかって言われたら、“訪れるように自分をつかをする”かんじです。自分が負のメンタルモデルに支配される状態（脳の思考に支配される状態）だとそれが訪れないでの、訪れるようにクリアにしてるといふのが、生き残るために生き延びようとする脳のパターンを使うと充実感がない。生き延びようとしているだけなので、ではこの脳でうまくいくんです。ところが、生き延びようとする脳のパターンを使うと充実感がない。生き延びようとしているだけなので、その思考で先を予測して打つた手というのは、

りょう そうそう。お笑い芸人がよく、笑いの神様が降りてくるつて言つけど、その感覚に

おきょう りょうさんのお話を聞いていて、り

想定の範囲内でしか物事が起こらないのでわくわくしません。そういう意味ではさつきの脳の仕組みの限界と言えると思います。ここでいようとしてるんじやなくて、結局、因果関係捉えた所で本当にそなのかはわからないので、そんなことで一喜一憂してもしやあないよねつて思つてるだけなんです。

おきょう なるほど……。“因果関係”といふことが見えない。それから一步出ちゃって、もともとそこに枠があるんだよっていうのを見ると、もっと外に広がつてのがわかるんですね。

でも、それがわからないんですが、何なのかわからぬ深い部分につながつた時に、体が熱くなったり、ワクワクしたり、インスピアイアされた感覚が出てくるんです。しかもそれが実は奇跡的なことを起こすものだつたりする。さつきの脳の範囲を超えているんですよ。その、先を予測して起こしたものじゃなく、本人も知らないうちに溢れ出てきたものを“純粹な”と表現します。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

おきょう おきょうさんを笑わせようと考えてやつても笑わせられないし、感動も人を感動させようと思つて出来るものじゃない。“目覚め”

つていう言葉もつづく難いところがあつて、

これも言葉（言語を元にした認識）の限界なんだけど、“呼び覚ます”つていうと、僕が原

因で相手が結果に聞こえてしまう。“目覚め

る”つていうとその人自身が起こしているよう

に聞こえて、“訪れる”だと第二者が原因にな

るから、言葉では正確に表現できなんですね。

どれも本当は、僕の感覚から言うと違うんですけど

よ。

</

ようさんは想いを言葉にすることの強さをアファメーションで伝えていると同時に、言葉の限界を感じているふうに見えたんですが。

りょう 言葉というか、認識の限界に近いです。繰り返しになりますが、人間の認識は因果関係でしかつくれなくて、認識はどうやって作ってるかというと語彙が作ってる。だから認識の限界があるんです。じゃあ、アファメーションは何をやっているのかっていうと、原因と結果を理解しようとして使う言葉ではなくて、世界はこうなるんだっていう魔法のノートを書くのと一緒に作業をやっていると思っていて。アファメーション＝宣言というのは、自分がこうやると決意表明をすることというより、単純に魔法のノートを書く作業なんです。例えば、僕が何かを宣言したから、これからがんばります！というかんじじゃなく、それは勝手に起こる。それをクリアな状態で言えば言うほど、別に僕が何をしなくとも勝手に起こってくるんです。それが本当のアファメーションの姿だと僕は思っています。先を予測して今の行動を決めるのではなくて、誰かが書いた小説が始まるように、自分の中を空っぽにしておく。ただ、偶然次第、運命次第の生き方との違いをわかっておく必要があつて、なんでも“運命のせい”ではなくて、あくまでその瞬間、自分のベストを尽くす。結局は自分を動かすしかないから、自分の出来ることを最大限やることが大切ですね。

* * * *

アファメーションは、まさにりょうさんが八月一八日に書いたものと同じような、小説のタイトルを決めることに近い。そしてそこに、は妙な負いがない。りょうさんがMLで「具体的に何を決意したことになったのかわからぬ」と言っていたあの状態は、ある意味ベストの状態だったということがなんとなくわかった。もしかの時先を予測していたら、その時点ではクリアではない。まさに理想は「偶然に身を委ねながら自分で舵をきる」ことである。当たり前の話だが、りょうさんが話してくれた内容は私にとってわからないことだらけだつた。ただ、“わからない”というのは、まったく響かない、受け付けられない話ではなく、脇腹の隅っこ辺りでは、実は自分も知っているんじゃないかと錯覚するほどしつくりきているような気もした。でもやはりそれは自分の感覚にはなつていない、消化しきれないものだった。

私は、たくさんの枠を気づかぬうちに描き、時々それに苦しんでいる。でも本当にそこの枠は存在するのだろうか？たまたま、今の私の器（体）だからうまくいかないと思いつんでいたり、忘れていたり、変えづらいだけであって、本当はもつと自由で、本来、無限の可能性に満ち溢れている。その今の限界と本来の可能性の両方を見つめたら、もつと今までの樂に、肩の力を抜いて生きられるんじやないだろうか。りょうさんの話を言葉ではなくて本当にわかつたら、私は今よりずっとシンプルに、余計な力を抜いて、波に揺られるのを楽しみながら生きられそうだな、と感じた。

私たちの中には、心を澄ませば澄ますほど、

鮮やかに見えてくる懐かしい風景がある。きっとりょうさんは、その風景を見つめる喜びや、味わう樂しさを、私たちに分かち合おうとしてくれている。

文 佐野恭子